911.368
Ku14
911.368-Ku14-4ウ
1200500756323
X
複写

40

911.368
Ku14
4

久保田万太郎句集

三田文學出版部

941
214

いとう句會の諸兄に獻ず

I

自大正十二年九月
至昭和二年一月
六十一題八十七句

炭の香のなみださそふや二の替

鉛打入橋間白浪

ゆく雁や屑屋くづつ八菊四郎

新參の身にあか〳〵と灯りけり

春の夜のぬかぼしこぞるくもりかな

音立てゝ雨ふりいづる春夜かな

日暮里渡邊町に住みて　二句

したゝかに水をうちたる夕ざくら

宵浅くふりいでし雨のさくらかな

買ひありく世帯道具よ花曇

ふりしきる雨はかなむや櫻餅

なつかしや汐干もどりの月あかり。

夏近しまなかひつくる蝶一つ。

ゆく春や屋根のうしろのはねつるべ。

島崎先生の「生ひ立ちの記」を讀みて

神田川祭の中をながれけり

お屋敷の塀のはづれの祭かな。

吉原のみよりいまなき祭かな

梅雨かけてなつかしまつり〳〵かな

百花園に行く。春夏秋冬花不斷の看板にそむきてみるかぎりたゞ青すゝきの夕かせになびけるのみ。ふりいでたる雨やうやくほんぶりとなる。

五月雨花の斷え間をふりにけり。

ある畝友達の訃をきゝて

ことしより早松茸にそゝぐ泪かな

ふりしきる雨となりにけり螢籠。

素人芝居にうきみをやつす男に與ふ

白粉を塗る不所存や蚊喰鳥。

女いふ

三味線をはなせば眠しほとゝぎす

浅草田町

垣結へるおなじ構へやほとゝぎす

ほとゝぎす根岸の里の俥宿

假越のやゝ落ちつきし蔓戸かな

明治座のむかしおもへば

久松橋蠣濱橋や雲の峰

いつにも覺えなき脚氣といふやまひをわづらふ。日々下島先生のもとにかよふ。さしたることはなきよしにて診察のあとはいつもの長話なり。

ふところの藥わするゝ浴衣かな

東京にては燈籠とのみいひて起し繪とも立版古ともいはず。むしろ組上といはむに如かず。組上燈籠といふほどのことなり

組上やいしくもつりし一文字

もち古りし夫婦の箸や冷奴

日暮里つくば臺所見

金魚の荷嵐の中におろしけり

淺草傳法院横町

甘酒の釜のひかりや夜の土用

淺草千束町のおもひでを語る

蓮咲くや桶屋の路地の行きどまり

秋近き底抜けぶりとなりにけり

藥研堀

大又の柳に夏も老いにけり

町中に老木の枝や盆の月

二階八畳と六畳、階下八畳と六畳と四畳半、外に臺所に附屬せる三畳、これがいまゐる渡邊町のうちの間取である。このなかでわたくしの最も好きなのは階下の四畳半である。奥まつた感じをもつてゐるからである。すなはちこの部屋をえらんで茶の間に宛つ

ひぐらしに燈火はやき一ト間かな。

八月二十六日は諏訪神社の祭禮なり

かまくらをいまうちこむや秋の蟬。

祭のあとのさびしさは

新涼の身にそふ灯影ありにけり。

とりとめしいのちつゆけきおもひかな。

露のふるけしきに消ゆる水泡かな。

人、大龍寺のかへりなりとて來る

うち晴れし淋しさみずや獺祭忌

吉原のある日つゆけき蜻蛉かな

墓原のまばゆく晴れし蜻蛉かな

硝子戸に風ふきつくる蜻蛉かな

とんぼ飛ぶや青空ながらくもりそめ

淺草にうつりて蚊帳のわかれかな

淺草馬道の玉突屋所見

あたりゲームたうもろこしも燒けにけり

新橋演舞場、たま〳〵入りのなき夜にて

康秀が夜長踊りてゐたりけり

田端

崖ぞひのふみかためたるみち夜長

灰ふかく立てし火箸の夜長かな

夜學子や鏡花小史をよみおぼえ

震災のあと駒込の樓紅亭に立退き半月あまりをすごす。諸事、夢の如く去る。二句

秋風や水に落ちたる空のいろ

いたづらにあかざのびたり秋の風

日暮里渡邊町に住む。親子三人水入らずにてはじめてもちたる世帶なり

味すぐるなまり豆腐や秋の風

日暮里諏訪神社まへにうつる。この家、崖の上にて庭廣く見晴しさはめてよし　三句

いたづらに大杏脫や秋の暮

空をみてあれど淋しや秋の暮

みえそめし灯影いくつや秋の暮

奉公にゆく誰彼や海嬴廻し

海嶽うちの廓ともりてわかれけり

町ところおよそ夜寒のうろ覺え

磯部にて

溫泉の町の磧に盡くる夜寒かな

はじめて寺田榮一に逢ふ

ふところの小ぎくとりでゝ小春かな

ぬれそめてあかるき屋根や夕時雨

喜多村綠郎に示す

力枝にしてもおつたにしてもしぐれかな

山茶花にあかつき闇のふかきかな

假越(かりごし)のまゝ住みつきぬ石蕗の花

鎌倉香風園

短日やすでに灯りし園の中

さめず川崎屋にて

まのあたりみちくる汐の寒さかな

いまは亡き尾上菊次郎の加賀見山舊錦繪の尾上役わすれがたし

うちかけの肩うちすべる寒さかな

旅中

桑畑へ不二の尾消ゆる寒さかな

病中人の訃に接す

粥啜るよみぢの寒さおもひつゝ。

向島

水鳥や夕日きえゆく風の中。

熱燗や狀書きさしてとりあへず。

深川

熱燗やきん稻のこの宵のほど

襟巻や亡秋月の人となり。

冬の夜や星ふるばかり瓦竈。

冬の夜や今戸八幡隅田川

根岸

日暮里へ師走のみちのつゞきけり

年の暮形見に帶をもらひけり

水戸さまの裏の小梅や一年の暮

□

はつすゞめ藪うぐひすのゆくへかな

双六をひろげて淋し賽一つ

闇の梅ばけものがるたはやりけり。

茶屋へ行くわたりの雪や初芝居●

下谷瀧泉寺町

水の谷の池埋められつ空に凧

凧の絲まきつゝはゝをおもふめる●

□

竹馬やいろはにほへとちりぢりに●

長男耕一明けて四つなり

淋しさはつみ木のあそびつもる雪

II

自昭和二年二月
至昭和九年四月
六十三題八十句

舊知と語る

きさらぎのめんくらひ凧あげにけり

青ぞらのいつみえそめし梅見かな

春雪のふりしきる際(きは)ありにけり

春の雪芝生を白くしたりけり

長火鉢抽斗かたく春の雪

雛の顔ゆるむ寒さのみゆるかな

雛かざるなかに髪結來りけり

枯柳うつせる水の淵みけり

蜆汁きのふ大火のありしかな

花どきの鏡山とて泣くしばゐ

きぬかつぎむきつゝ春のうれひかな

はながみに心おぼえや蛙なく

ゆく春やをり〳〵たかき沖津波

谷口喜作君に

うさぎやにあとゝりできし幟かな

優蔵さんの初節句に

番町の空に立てたる幟かな

迪雀町の藪にて

らんぎりのうてる間まつや若楓

校長のかはるうはさや桐の花

ふすまもる灯影のありて明易き

かず〳〵の亡き人おもふ蚊遣かな

夏の蝶高みより影おとしくる

つゞきもの書きはじめたる青簾

田端自笑軒

年々の忌日と額の花とかな

妻の姪むつ子ことし十七なり

狹き帶しめて凉しき立居かな。

藤井六輔病む

胸に手を組みてねむれる浴衣かな

夏の月いま上りたるばかりかな。

あげきりし汐の情や日のさかり

つゝみくれし麥落雁や日のさかり

うきくさの水際はなるゝひるねかな

芥川龍之介　佛大暑かな

上野櫻木町のさる方にて

土用の日下枝に落ちてしづかなり。

旅中

そびらぬく汗にも秋の近きかな

待てど來ぬ人をうらみず夜の秋。

新潟にて

秋立つとのうぜんかつら垂るゝかな

毎月二十七日はお諏訪さまの縁日なり

買つて來しばかりまはるや走馬燈

木がくれになりし遠さや盆の月

照りこみし空に花火のあがるかな

ゆふぞらにひかりみえ來し花火かな

糠雨のいつまでふるや秋の蟬

日暮里に住みてはや十年なり

きのふより根津の祭(まつり)の殘暑かな

ある若き落語家に與ふ

三味線も器用に彈きて芙蓉かな

おそのに扮したる花柳章太郎に

あさがほや累ケ淵の一トくさり

あさがほにまつりの注連の殘りけり

帝大齒科病室にて　二句

看護婦の一人髪結ふ芭蕉かな

賄の車來てゐる芭蕉かな

つゆけさのさそへる强き雨となり

ある人の來りていひけるは

苦の娑婆の蟲なきみちてゐたりけり

月の雨一トきは強くなりにけり

後藤良介十三回忌

雁の秋あきたなまりのなつかしき

鶏頭に秋の日のいろきまりけり

ことゝく硝子戸閉てし冷やかに

あきかぜのふきぬけゆくや人の中

尾上菊五郎鏡獅子のくまどりに

あきかぜに團十郎をおもふかな

峰つくる雲もなごりや秋の暮

秋の暮月あきらかにうかびたる

堀切

水車まはりゐたりし秋の暮

しらぎくの夕影ふくみそめしかな

菊市へつれだつなかや娘分

帝大齒科病室にて

藥きいてきてゐる鵙の高音かな

朝寒の空めだゝしき高さかな

吉原の菊のうはさも夜寒かな

淺草公園

茶ばたけのなかの夜寒をたどるかな

某君就職

語りけり小春うれしき人の上

小山内先生追悼講演會

しぐるゝや大講堂の赤煉瓦

木の間ふりいでし時雨のみゆるかな。

雪中庵病むときゝて

門の邊の八つ手の霜をおもふかな。

うぐひすの山茶花くゞりゐたりけり。

ふりいでし雨ぬれそめし落葉かな。

自働車疾き音のきこえ來落葉かな。

わが戀よ

寒き灯のすでにゆくてにともりたる。

雪中庵通夜

すこしづゝ夜のあけて來る寒さかな

春太夫の新内を聽く

冬の夜のまことみよとや彈語り

やがて入り來る四五人や年忘

拭きこみし柱の艶や年忘

煮凝に哀しき債おもふかな

寒の雨芝生のなかにたまりけり

□

彈初の御祝儀の雪ふりにけり

双六の賽に雪の氣かよひけり

まゆ玉の垂れてともるを待てるかな

まゆ玉やきのふとなりし雪げしき

ふりいでし雪の中なる松飾

III

自昭和九年五月
至昭和十一年四月
五十七題八十句

春麻布永坂布屋太兵衛かな

よせなべの火の強すぐる二月かな

冬にまたもどりし風よ白魚鍋●

春の夜のすこしもつれし話かな

さる方にさる人すめるおぼろかな

花の山ゆめみてふかきねぶりかな

花人のおかる勘平をどるかな

花人のしやッくりとまりかねしかな

花ぐもり鶯笛をふいてゐる

夕蛙かんざしてきて來りけり

みづから恥づ

ふかざけのくせまたつきし蛙かな

昭和十一年四月二十六日、亡き澤村源之助丈初七日、この日たま〳〵百花園主人より萩の根分けてもらひたれば

源之助わすれじの萩植ゑにけり

鵙屋春琴脱稿

一年の重荷おろせし袷かな

捨つべきものは弓矢なりけりとや

ひさ〳〵に角帶しめし袷かな

ことしより堅氣のセルを著たりけり

菖蒲見の風いと強き日なりけり

大淀とありてあやめの濃紫

青梅をふるさとびとよ打落し

若きひと死んで哀しき螢かな

帶解きてつかれいでたる螢かな

ことのほか蒸す夜となりし螢かな

下仁田にて

瀬の音のうすくきこゆる螢かな

鎌倉一ト夏の假住居にて

棕梠の葉のあはれ青しや蠅叩

徳川夢聲君近著

ほとゝぎすなくやくらがり二十年

自動車のとまりし音や青簾

池の邊のあぢさゐにあけきりし夜ぞ

盆まへのあつさみえ來し往來かな

すでにつんでゐる將棋なり雲の峰

おもひでの町のだんだら日除かな

結ひあげて涼しき髷となりにけり

口紅のいさゝか濃きも涼しけれ

叱られて三味線さらふ浴衣かな

生さぬ仲の親子涼みてゐたりけり

まはりをりいたるところに煽風機●

水中花咲かせしまひし淋しさよ

荻の中しばしい行きて蓮をみる●

震災のおもひでとや

一トむかしまへうち語る切子かな

鎌倉一ト夏の假住居にて

ながあめのあがりし燈籠流しかな

たくましく長けてあはれや鳳仙花

妻熱海に病む

芒の穂海の濃青をふくみけり

芝公園

夜の萩の火影うけたるところかな。

百花園にていとう句會、雨に怯げてやあつまるものわづかに五人、園内千歳にて小酌　二句

十六夜の雨の傘さしつゝかな

十六夜や直しに立ちし燗ざまし

東海道を下る

小田原に三島に蚊帳のわかれかな

柳戸はる子幹部に昇進す

草の花ひたすら咲いてみせにけり。

膝關節捻挫にて籠居　二句

搔卷もまくらも秋の風の中

秋風にきのふもけふもなかりけり

畑毛溫泉

秋風やどこにも稻田うちひらけ

簾透く水のひかりや秋の風

箱根

みえてゐて瀧のきこえず秋の暮

うれひなし汝が剝く柿のいと赤く

戒名をことづかりたる夜寒かな

ころあひにつきたる燗も夜寒かな

買つて來しものに夜寒のさくらもち

熱海にて　二句

瀨の音をきゝつゝ貼りし障子かな

障子貼つて月のなき夜のしづかなり

澤渡りの石ぬれそめし時雨かな

夕時雨野の枯いろの濃かりけり

昭和十年十一月十六日妻死去

來る花も來る花も菊のみぞれつゝ

妻の初七日妻の姉より申出あり、受諾

ふッつりと切つたる縁や石蕗の花

二七日すぐ三七日の青木の實

妻の七七日を目前にひかへて

掃くすべのなき落葉掃きゐたりけり

箱根にていとう句會　二句

短日や鏡のなかの山の膚

短日の耳に瀬の音のこりけり

しづけさは
炭ついでゐるをみてをり源之助

久方(ひさかた)の空いろの毛絲編んでをり

會津若松にて
冬の雨磐梯みせずふりにけり

一月や日のよくあたる家ばかり

昭和十一年一月三田小山町にうつりて　二句
廻り縁寒(かん)に入りたるけふしもや

唐紙のあけたて寒に入りにけり

おもふなり月の吉原煮凝に

本郷は切通し上吹雪かな

慶應病院別館

シクラメン雪のまどべにしづかなり

三田小山町といふところ

雪掻いてゐる音ありしねざめかな

□

繭玉に晴れぬく空のひかりかな

時計いま十二時うてり繭玉に

まゆ玉にいよ〳〵雪ときまりけり

まゆ玉や三枚續よみつゞけ

とりいでゝかけし春著の襠かな

門松に夕凍(ゆうじん)いたりそめしかな

IV

自昭和十一年五月
至昭和十三年七月
九十五題百三十二句

三田四國町に住みたるころのあけくれよ、人こそ知らね

いてどけをみせて桐の木立つばかり。

妻をうしなへる人に

いてどけのなほとけかねてゐるところ

病人のやつぱり死にて冴返る。

春の風邪無理から髪を結ひにけり

春しぐれ一トとき雲の濃かりけり

春の雪しきりにふりて誰もゐず

春水のあるひはながれいそぎけり

春水のみちにあふれてゐるところ

ぬかるみをよけてあるくや紅椿

しら梅かあらずしらたまつばき汝(なれ)

耕一盲腸炎にて入院

はるさめに似げなきふりの木々暗く

四月馬鹿ものおもふことにつみありや

花柳章太郎二十三四年ぶりにて日本橋のお千世を演ず

何もかもむかしとなりてかぎろへる

よその花は赤しとや

かなひたるねがひにながき日なるべし

すこし蒸す陽氣のさくら咲きにけり

夜ざくらや何かにつけて馬鹿ばやし

鎌倉香風園

のしかゝるもの杉ばやし花曇

入學のはかま瀧縞敵役

入學の房のつきたる帽子かな

うらゝかに汗かく耳のうしろかな

二人づゝ三人づゝ連れ春日傘

くたびれて來てたゝみたる春日傘

一つづゝ春の灯ともり來りけり

何事もあきらめて春惜みけり

古驛菖蒲葺くさへあはれなり

おもふさまふりてあがりし祭かな

大森

年々に空地へりゆく祭かな

寺の門でゝ苗賣に逢へりけり

今日のこと今日すぐわする桐の花

麥の穗によせて哀しきおもひあり

紫のさまで濃からず花菖蒲

蓮の葉のひたすら青き梅雨かな

梅雨の蝶たま〳〵まよひ來て黃なり

籠居十數日に及ぶ

徴の宿寢すごすくせのつきにけり

手摺まで闇の來てゐるひとりむし ○

おくるひとおくらるゝ人ひとりむし

新劇座同人參集　二句

むづかしき話めぐるや夜の蠅

一つ追ひをれば二つに夜の蠅

蜻蛉生れ水草水になびきけり

いづこよりわく水やらむ萍に

萩のびて來てなつかしき葭戸かな。

氏より育ちとや

貧乏のとかく苦になる蚊遣かな

夏帽子おなじうれひにかむりつれ

この戀よおもひきるべきさくらんぼ

日の落ちしあとのあかるき青田かな

日本橋倶樂部にてさみだれ會

夏座敷爲春三升すでにあり

煽風機とめれば雨の音のまた

箱根堂ヶ島にていとう句會　二句

いつまでもつきざる話縷々涼し

秋くさをいさゝかまじへ草涼し

いつもゐる俥屋みえず朝曇

木斛か黐か知らねど朝曇

うすものを著て前生をおもひけり

胸もとに蟲の入りたる浴衣かな

行末のことおもはるゝ端居かな

ふたゝび出づれば夜店なほ宵のさまに

箱根仙石原温泉荘クラブハウスに一泊　二句

日のさして來て秋近し草の中

にじますもやまめもこひも夜の秋

□

昭和十一年七月、ことしわが家は新盆なり　五句

迎火やをりから絶えし人通り

迎火やあかるくともる家のうち

世に淨きものゝ切子の房垂るゝ

犬遠く吠えて切子のしづかなり

送火をたきてもどるや膳のまへ

□

宮田重雄君應召

星今宵わかき博士は兵に召され

石神井

三寶寺池はまださき殘暑かな

六世尾上松助逝く

いなづまのやうやくよわく淋しさよ

玉くしげ箱根の山の花火かな

玉川の花火といへるまれにみえ

入谷のむかしをおもふ　二句

あさがほをみにしのゝめの人通り

朝顔をみていまかへる俥かな

築地八百善にて岸田國士岩田豐雄兩君と小酌

ひぐらしや煮ものがはりの鰌鍋

芝に住めば

だら〳〵とだら〳〵まつり秋淋し

寶亭青春を語る

大正のまへの明治の秋の夜ぞ

秋の蚊帳まだあかるきにつられけり

秋の蚊帳かみなりうすくきこゆなり

いまはむかし　二句

百花園もとより浸(つか)り秋出水

秋出水言問團子休みけり

眞船豐君に示す

人生事枝豆青くうだりけり

新劇座同人と會津東山に滯留

かたまりて咲きて桔梗の淋しさよ

箱根仙石原溫泉莊クラブハウスに一泊　三句

山の夜のビール四五本女郎花

新聞の來ること遲し女郎花

女郎花ぬらす雨ふり來りけり

花巻温泉にて

きこゆるは瀧の音とや曼珠沙華

月みゆるところに立てる一人かな

月仰ぐ眼鏡の枠に月あふれ

瀧の川瞬依村荘にていとう句會

わがまへの梨も葡萄も無月かな

人にこたふ

立ちいでゝわが門べなる冷かに

友田恭助戰死の報に接す

死ぬものも生きのこるものも秋の風

田村秋子に示して友田恭助のありし日をおもふ
三句

帽子すこし曲げかぶるくせ秋の風

子煩悩なりしかずゝ野菊咲く

梨剝いてやりながら子に何いへる

馳けだして來て子のころぶ秋の暮

銀座

連れのある人ばかりなり秋の暮

十三夜風のいで來てらうがはし

十三夜くもるはずなく曇りけり

十三夜はや〳〵雨戸入れにけり

栗飯のひえしをよそひくるゝかな

秋しぐれ塀をぬらしてやみにけり

芝公園

みるかげもなく蓮は枯れ夜寒來る

いへばたゞそれだけのことと柳散る

したゝかに音のそひきし時雨かな

あさづけのまづくなりたる時雨かな

くもり來て二の酉の夜のあたゝかに

三の酉つぶるゝ雨となりにけり

短日やうすく日あたる一トところ

ざぶ〳〵とあがり湯あびて日短き

中村吉右衛門丈に示す

この舘のゆゝしき冬の夜をおもふ

ひさゞくにて小説集を上梓、枯菊抄と名づく
三句

枯菊を焚きたる灰のあがりけり

枯菊とゝもに焚きたる何々ぞ

枯菊を焚きつゝおもふこと一つ

病む　二句

枯野はも縁の下までつゞきをり

向きかへてふたゝび眠る屏風かな

一中ぶしはじまる冬の座敷かな

暖房にビールの酔のいまださめず

暖房に日比谷公園みゆるかな

エプロンをとりて肩掛かけしのみ

肩掛におとがひ埋めて立てる好く

何もかも曇つてしまひ都鳥

年の市浮雲月をかくしけり

みかけたる三升家小勝慈善鍋

慈善鍋なんすれぞ雪ふりいそぐ

畳替松は雪吊すませけり

畳屋のつかふ庖丁畳替

はんだいの箍こそみがけ年の暮

鎌倉海濱ホテルにて

ゆく年の海よくみゆる部屋にあり

ゆく年のひかりそめたる星仰ぐ

除夜の鐘鳴りはじめたれ夜番來る。

一月やはしらわさびも煮こゞりも

一月やほとけの花のゆきやなぎ

戲曲はくじやうもの執筆

淺草も隅田公園ちかき雪

節分をみかけて雪のふりにけり

眞砂碩吾翁に

雪に獲れし鴨にて雪にとゞきけり

元日のきびしき凍となりにけり

V

自昭和十三年八月
至昭和十七年三月
九十七題百四十二句

浅草の茶の木ばたけの雪解かな

梅が香のかよふ薄氷むすびけり

高田保君に示す

わかさぎにほのめく梅の匂かな

畑毛温泉

ゆふやけの藁塚そむる餘寒かな

留守見舞餘寒の格子あけて入る

オリエンタルホテルに投宿

海青くみえて神戸の餘寒かな

階下三間の一ト間に雛をかざりけり

だいがさをかたげて老いし雛かな

のぶ子に

春水に袂かゝへてかゞみもし

あつまるもの十年二十年のふるき附合のみなり

脇息といふじやまなものの春火桶

おなつ來ておさだまだ來ず春火桶

おもひつきたるまゝをしるす

春火桶たがひにうそをつきにけり

あたゝかに灰をふるへる手もとかな

愛息をうしなへる澁澤東資會長に

ゆく雁のかげさへ雲にまぎれけり

種彦の死んでこのかた猫の戀

遠退(とほの)きて赤きものある牡丹の芽

うす雪のかゝる牡丹の芽をおもふ

某日、急遽、午前八時五十分發の臨時列車にて西下

げんげ田のつゞきて名古屋ちかきかな

上野揚出し

春曉や赤く塗りたる下足札

めづらしく風のなき日の春の雲

銀座岡田にて

春の夜の牡蠣小さくはしら大きくいみじ

時計屋の時計春の夜どれがほんと

春の灯のあるひは暗くやはらかく ●

澁澤秀二君を悼む

春の月なまなか照りてかなしきよ

旅中

きえ〳〵に白山みゆる柳かな

田園調布

來たことのなきみち落花しろき道

芝公園

なにはやと假名で書きたり花の雨 ●

秦豐吉夫人を悼む

こゝろありて花の雨さへふりつゞけ

沙美さん招宴

すこしづゝ醉ひて來りて春惜む

しら藤の咲きたるゝあり薄暑來る

淺草馬道に人を訪ねて

ふく風もまつり間近くこのあたり

よき灯ありをり〳〵梅雨の風かよふ

釋雨莊即事

蟲籌もえてゐれどもはや十時

愛嬢をうしなへる堀内敬三君に

かほどまで百合の香のなど哀しきや

永坂の更科のはや夏ぶとん

いまは清元なにがしと名告る人に

手紙書くひまのできたる單衣かな

花莫蓙にやまひおもりてゐると知らず

行水の湯の沸きすぎてしまひけり

夕端居一人に堪へてゐたりけり

デーブルランプふかき笠きて涼しどよ

芝嶺峨野にてさみだれ會

日ざかりをすぎたる雲のうまれけり

日向水ひろごる雲をうつしけり

良緣をえたる大江良太郎に

冷房のなかにあきくさ咲かせけり

雲の峰青き表紙の記憶のみ

川下何事(なにごと)もなき川上の雲の峰

妓たちはや來てゐたる切子かな

雨車軸をながすが如く切子かな

鎌倉香風園

ひぐらしや去年のけふもこの部屋に

大江堯郎三回忌

かな〳〵のはやなきいでし忌日かな

かな〳〵のいまゝで鳴いてゐたりしが

法師蟬村雨雲をよびにけり

町を行く町につく〳〵法師鳴き

また九月一日來る秋の蟬

向島

大溝の名残こゝにも蓼の花

鎌倉海濱ホテルにて　二句

波の音をり〳〵ひゞき震災忌

かまくらの月のひかりや震災忌

いなびかりまだ四五日はふるまじく

□
昭和十四年九月七日午後二時四十分泉鏡花先生逝去せらる

番町の銀杏の殘暑わすれめや

鏡花先生逝去の報一トたびつたはるや弔問の客引きも切らず、その中に老妓あり「仲之町にて紅葉祭の事」以來のおなつなり

しらつゆのむれておなつも泣きにけり

鏡花先生お通夜の席末にありて

露の夜の空のしらみて來りけり

九月十日鏡花先生告別式、朝來驟雨しば〳〵いたる

萩にふり芒にそゝぐ雨とこそ

□

谿浅く露のみちゆく足音あり

草の葉も露もおどろきやすきかな

花すゝき汗をふきつゝ連れの來る

待宵の雲のゆるびて來りけり

明治座の樂屋より金座通りに出づ　三句

月すでにいでたるらしきみえねども

このみちのこのしづけさに出でし月

月かくす術なき屋根となりにけり

十六夜のつゆけき屋根のみゆるのみ

十六夜やいくまがりして階子段

雪岱書伯の一周忌來る

十六夜や四谷見附のみさごずし

秋袷育ちがものをいひにけり

藪つ蚊の來てまださすや曼珠沙華

曼珠沙華露に潰えてしまひけり

喜多村緑郎三枚續の火の玉の愛吉に扮す

襤褸袷赤大名の曼珠沙華

昭和十五年十月十七日小村雪岱畫伯逝去

あきかぜの疾渡る空を仰ぎけり

人來りて義へを訴ふ

あきかぜにひるねのくせのまだやまず

塀について塀をまがれば秋の風

長き夜の空存分にくもりけり

柳散り蕎麥屋の代のかはりけり

柳散りしきていぶせきかぎりかな

はつしぐれ芝居につきてやみにけり

しぐるゝや橋へとみちのやゝ高く

新海苔の艶はなやげる封を切る

わざはひも三年たちし小春かな

雲のなき空つら〳〵と日短き

短日やされどあかるき水の上

冬の灯のいきなりつきしあかるさよ

小石川後樂園にて

かはせみのひらめけるとき冬木かな

鎌倉海濱ホテルにて

枯芝のときに青みてみゆるかな

昭和十五年十二月四日、雪岱畫伯七七日、千歳烏山妙高寺にて　二句

枯芒刈りふせてありことゞく

蘆も枯れすゝきもかれてしまひしよ

青沙庵にて

さゝなきやついぢのたくむ一トさしき

おでんやにすしやのあるじ酔ひ呆け

熱燗にうそもかくしもなしといふ

一人だけ雑炊あとはみんな蕎麥

かけつけのこのわたざけはすこし無理

煙草買ふ連れをまちても枯野かな

冬田道火を焚いてゐてしづかなり

マスクしてふところ手して何おもふ

いつかまた出世おもへりふところ手

毛絲編むうしろに立つを誰とせむ

淺草の市をとゝひのみぞれかな

狐火のでることうそでなかりけり

狐火もみえ月もでゝゐたりけり

狐火をみて東京にかへりけり

冬の夜の灯のなまめきて來りけり

冬の夜や笄なかく女夫揺

冬の夜の雨ぬかるほどふりしかな

クリスマス眞つ暗な坂あがりしが

鎌倉に馬車の往來やクリスマス

年用意霧あたゝかき日なりけり

稽古扇をおもふ

髪結のおつなのもとの年用意

墓ぬらす雨のふるなり年の暮

□ 昭和十七年を迎ふ

十二月八日おもほゆ初日かな

初髪を結ひをり雪のふりてをり

廻禮の人めも草も枯れしみち

深川のたかばしとほき年賀かな

ゆふやみのわきくる羽子をつきつゞけ

彈初にことし缺けたる一人かな

彈初の灯ともしごろとなりけるや

せりあげのなりものゝいま初芝居

春著きて人めなければ泣きしとふ

繭玉や人のこゝろのうつくしく

歯いたくていたくてならず切山椒

□

寒餅のとゞきて雪となりにけり

寒詣かたまりてゆくあはれなり

ともにゆく寒鮒釣のゆくみちを

釣堀にての信夫に扮したる中村伸郎に與ふ

寒鮒を釣る親と子とならびけり

寒の月しきりに雲をくゞりけり

一月二十三日

圓生のうたふ聲きこゆ寒の月

寒の月夜のひきあけに殘りけり

大寒の星雪吊に光りけり

寒燈といひたけれどもやゝ艶に

冴ゆる夜のこゝろの底にふるゝもの

説き來り説き去りて手のかじかめる

人の落ちめかじかめる手をひたに摩り

かじかみし手をよせ來る戀としも

秋田よりの歸るさ温海といへるところに一泊

海も雪にまみるゝ波をあぐるかな

雪しづく日ざしに狎れて來りけり

雪ぞらのほのかに赤きところかな

鎌倉にて

梅もはや咲きたりといふ椿みる

索引

一　月

一月(89・139)　□元日(149)　初日(18)　はつすゞめ(31)　門松(13・93)　廻禮(18)
・春著(78・13)　羽子(12)　かるた(32)　双六(62)　凧(32)　初髮(12)　彈初(32・152)
繭玉(62・51・14)　初芝居(32・13)　切山椒(184)　□寒の入(82)　寒の月(186)　寒の
雨(61)　寒燈(187)　寒詣(185)　寒餅(184)　寒餅(185)　大寒(7)　煮凍(61・90)　冴
ゆる(12)　かじかむ(18)　雪(33・90・139・189)　竹馬(33)　青木の實(87)　早梅(190)

二　月

春(67)　二月(37・67)　冴返る(97)　餘寒(144)　春時雨(98)　春の雪(37・98)　雪
解(143)　凍解(97)　薄氷(143)　二の替(5)　春の風邪(98)　猫の戀(147)　わか
さぎ(143)　白魚鍋(67)　梅見(37)

三　月

暖か(147)　春雨(100)　陽炎(101)　春の雲(149)　水温む(39)　雛(38・145)　春火
桶(146)　蜆汁(39)　櫻餅(7)　歸雁(5・147)　牡丹の芽(148)　げんげ(148)　椿(99)

四　月

うらゝか(103)　日永(101)　春鶯(149)　春の夜(6・68・149)　春の月(150)　朧(68)
春の水(99・145)　四月馬鹿(100)　入學(102)　新參(5)　汐干(8)　春の灯(104・150)
春日傘(103)　春愁(40)　萩植う(79)　柳(151)　櫻(6・101)　花(40・68・151)　花曇(7・
69・162)　落花(151)　蛙(40・79)　夏近し(8)　ゆく春(8・41)　春惜む(104・152)

五　月

給(71)　菖蒲葺く(106)　幟(41)　セル(71)　苗賣(106)　祭(9・105・153)　薄暑(152)

若楓(42) 桐の花(42・106) 穂麥(106) 早松茸(10)

六　月

梅雨(107・153) 五月雨(10) 黴(108) 花菖蒲(72・107) 明易し(42) 時鳥(11・51) 蟲籠(153) ひとりむし(108) 螢(11・73) 蠅(74・109) 單衣(154) 夏帽子(111) 蝙蝠(11) 蜻蛉生る(109) 青簾(45・75) 蔑戸(12・110) 蚊遣(45・110) 夏ぶとん(154) あぢさゐ(75) 額の花(44) さくらんぼ(111) 青梅(72) 萍(112) 夏の蝶(43) 暑さ(76)

七　月

朝曇(113) 青田(11) 雲の峰(13・76・157) 金魚(14) 夏の月(45) 大暑(46) 土用(14・46) 日ざかり(45・156) 日除(76) 冷房(157) 夏座敷(112) 煽風機(78・112)

水中花(78) 花蓮蓮(155) 晝寢(46) 日向水(156) うすもの(114) 浴衣(13・44・77・114) 行水(155) 端居(114) 冷奴(14) 納涼(77) 夜店(115) 組上燈籠(13) 百合(154) 蓮(15・78) 涼し(44・76・112・156) 秋近し(47・115) 夜の秋(47・115) 晩夏(15) □迎火(116) 切子燈籠(79・116・158) 送火(117)

八　月

秋(129) 七夕(117) 立秋(47) 殘暑(49・118・162) 新涼(17) 盆の月(16・48) 稻妻(118・161) 燈籠流し(79) 走馬燈(48) 花火(48・118) 蜩(16・120・158) 法師蟬(159) 秋の蟬(16・49・160) 朝顏(50・119) 鳳仙花(79) 蓼の花(160) 芙蓉(50)

九　月

震災忌(161) 秋風(21・52・82・126・168) 秋出水(121) 露(17・51・162) ひやゝか(53・125)